

## 排滿思想の意味

— 楊篤生の場合 —

板垣 望

北一輝の『支那革命外史』は、北が孫文の「米國的民主共和思想」に對比させた排滿思想とは一體何なのか、という問題への關心を呼び起こすが、このノートに於ては、それを楊篤生の場合について検討してみたいと思う。

楊毓麟、字篤生、改名守仁、號叔壬。清同治壬申（一八七二年）一〇月長沙に生れた。七歳にして文を能くし、一五歳、博士弟子員に補され、後、業を省城の嶺麓・城南・校經三書院に肆い、性理佛老及び經史百家を精研した。九四年、日清戰爭に際し江防海防策を作り當局を痛詆、時に學使張亨嘉・江標は特に之を賞し、九六年、選拔を得、翌丁酉（九七年）科には拔貢孝廉となり、戊戌一試に春官、又廣西知縣に分發されたが任に至らず、遂に仕進の意を絶った。湖南變法運動に於ては、後にその失敗後、清朝體制の改變ではなく、それからの自立をめざすに至った唐才常らと共に時務學堂教授に任じ、江標による科

舉答案を整めた『沅湘通藝錄』（八卷、丁酉冬梓行）にも列名、政變後は郷に避けて難を逃れ、九九年、江蘇學使瞿鴻禨の聘に應じて入幕したが、宦途汚濁を以て辭去。一九〇〇年から〇一年の間は開明的な湘紳、龍湛霖のところに行ったが、やがて〇二年春、東京に渡り、初め宏文學院、繼いで早稻田大學に入り、『政治學大綱』二卷、『哲學大觀』二卷、『史學原論』（浮田和民著）等の譯著を著わし、かたわら黃興・陳天華ら湖南の留東同人と『游學譯編』を發行したが、これは大半楊の作に出るものだったという。〇三年、〇四年の間には、政府軍の指揮下で拒俄禦侮に托して以て革命を謀らんとした拒俄義勇隊、ついで「拒俄なる口號も清政府を欺く能わず、適に以て自ら吾が民に復た一の奴隸の模型を示すのみ、故に宗旨は之を表明せざる可らず」として登場してくる軍國民教育會の動きに参加、會中に暗殺團（中國革命黨會）を密設し、率先して爆炸物を研究中誤って一眼を失明することもあった。〇四年夏、暗殺隊を組織して東京から北京に歸り、機會を待っていたが乗ずる可き隙なく、そこで既に軍國民教育會回湘運動員として湖南に歸り長沙起義を準備していた黃・陳・劉揆一らの電召により上海に南歸して、暗殺主義の影響をうけていた蔡元培・章士釗らと機關を密設し、湖南及び東京との接濟の任に當った。しかし九月湘事敗れ、黃らは上海に亡命、再學を謀って新開路に機關（愛國協會）を設け楊を推して會長としたが、萬福華の王之春を刺す案が發するに及んで手入れをうけ、爲に守仁と改名、計を變じて政界より溷跡し、再び京師に走って、江海發難は中央潰變の收

效迅速なるに如ずとして中央革命に従事せんとし、張百熙（長沙の人、張祖同の弟）の幕に入り譯學館教員に任じつつ、かたわら彼の信徒吳樾らと北方暗殺團を主持、機を窺っていたがやがて憲政考察出洋五大臣隨員にもぐりこむことに成功した。○五年九月二六日北京正陽門車站に於て吳は炸彈自爆により計畫失敗して之に死んだが、楊は疑い未だ及ばず、東京まで同行、黄・陳・宋教仁らと共に成立間もない同盟會の擴充を籌商、隨員を辭して再び東京に留まること半載にして、○六年夏再び上海に歸り正利厚成肆を設けて江海の交通機關となし、○七年二月、于右任らと「神州日報」を創刊、又湖南礦産をドイツ人に賣らんとした汪康年らと争い、本に廢約せしめることもあった。○八年、報館の事を辭去、事機未だ熟さずと判斷して、清廷派遣の留學生監督劉光典の聘に應じて祕書長となりイギリスに赴き、旋で○九年冬を以て謝去、スコットランドのアバデーンに移住、そこで少年の日の精力が徒らに科擧等に費されてしまったことを歎じつつ改革後の建設の爲勉學に勵んでいた。しかし辛亥三月二九日廣州の役に黄ら同志の精華漸減すと聞き、憂傷度を過し夜寐を成さず、馮自由の書を得て黄の恙無きを知るも、頭痛浮腫更に大、加うるに外人の中國瓜分の激刺に感じて、ついに閏六月一二日、リヴァプール大西洋岸に投じて死んだ。死年四〇。積んでいた一百鎊を石瑛・吳稚暉に托して黄に寄せ、革命運動軍費とした。尸體は漁人が撈起し、曹亞伯らが厚く葬ったという。

(1) 傳は以下の四つを参照。

楊昌濟「蹈海烈士楊君守仁事略」〔碑傳集補〕卷五七所收)

これは文中に「至今年閏六月……投身利物浦海中」とあるところをみると、楊の死後間もなく書かれたものである。しかしそれだけに、よく調べて書かれたものではないようである。(楊昌濟は字懷中、長沙の人、清諸生)

曹亞伯「楊篤生蹈海」〔武昌革命眞史〕、中國近代史資料叢刊「辛亥革命」(四)所收)

曹は楊の屍をリヴァプール公墓に葬った人。文中には弟、楊殿麟の述べた事略と湘人某の作った傳の二つが引いてある。種々の點から見てこの傳が最も良い。

馮自由「新湖南作者楊篤生」〔革命逸史〕第二集所收)

『清史』第八册、卷五五〇、『革命黨人列傳』四(國防研究院、中華民國五〇年發行)

これは誤りが多く、信用できない。

(2) 後、江標により變法運動の一環として同書院内に興地・算學・方言(英語)學會が設けられる。吳相湘『宋教仁』(臺北、文星書店、六四年)五頁參照。

(3) 變法運動の最左派といわれる湖南に於る革命運動については次の研究がある。

鄧潭洲「十九世紀末湖南的維新運動」〔歷史研究〕五九年第一期)

小野川秀美氏「戊戌變法と湖南省」〔清末政治思想研究〕

京大東洋史研究会、六〇年、所收)

佐々木保子氏「湖南變法運動について」(『史艸』五號、

六四年)

佐々木氏は湖南變法に關係した郷紳層が運動の深化に伴って分化していった點に注目してそれを二種に大別し、楊をその第二種、開明的中小郷紳に數えている。(なお楊の出身について曹亞伯前掲書では「家故小康」としている。)

(4) 楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』(湖南人民出版社、五八年)及び譚彼岸「俄國民粹主義對同盟會的影響」(『歷史研究』五九年第一期)は彼が東京に於て間もなく興中會に参加した、としているが、前掲の諸傳にはその記述がなく不明。

(5) 月刊、〇二年一〇月刊、湖南編譯社刊、全一二期。

これより先一九〇〇年に創刊されていた『譯書彙編』が「單行本を譯しているのと、ことなり、新聞雜誌にのった論文をも選擇」譯載しており、且つ前者が「純學問的なのにたいし、これはいささか政治的傾向がある。」とされる。(さねとう・けいしゅう氏「中國人 日本留學史」くろしお出版、六〇年、二六六頁参照。)

(6) 楊の思想に於る暗殺の占める位置については譚彼岸前掲書に次の如き指摘がある。即ち譚によれば楊・吳樾らはロシア民粹派の暗殺政策を接受したが、その際、その無政府主義思想は拋棄した點が指摘されなければならない。彼らの暗殺は、無政府の爲ではなく、「民族建國主義」(後に

詳述)を建立する爲であつて、そこでは決して國家や主權の存在は否定されていない點が問題にされなければならない、とする。

(7) 宋教仁『我之歷史』第三、〇六年一月二日、同三日の條にその事が見える。

(8) 蘇報等の覆轍に鑒み、旁敲側擊の文字を慣用したという。馮自由「神州日報小史」(『革命逸史』第二集所收)參照。

(9) 楊昌濟前掲書では一日。

## 二

さて、かくの如く楊は、變法派から革命派へと轉進していく經歷を一身で持つに至つたのであるが、ここで救國という課題自體は前後を通じて不變であるとするれば排滿思想の導入が、その轉換の指標となる。とすると、そのような排滿思想の導入によって彼は如何に救國という課題の解決法を深化させようとしたのか、それを以下、彼の著作の中にさぐってみたい。

「民族主義の教育」は前記『游學譯編』の第一〇期(〇三年九月出版)にのせられたものであるが、ここで楊は、現在、救國の課題を果す爲には、國民の精神を振起し、國家の思想を養成しなければならぬ、として「國民教育」が叫ばれているが、それでいいだろうか、と問う。「國民教育」は梁啓超の「新民說」などと同じく、清朝體制を下(國民)から作り變えていくとするもので、本質的には變法論の範疇内にあるものであ

る。かつて時務學堂教授として梁の下でそれを實行せんとし、そしてそれが挫折する光景を眼のあたりに見た楊は、その失敗の跡を見つめる中から「國民と民族とは、その意義包含するところ絶えて異なる」のではないか、ということを見出す。これまでは大した疑問もなく、いわば議論の前提として、一つのまとまった概念として把握されていた「國民」という概念の中から、「民族」という概念が析出されるのである。楊篤生に於る「民族」の發見——「今、民族主義の一段階を躰去して鬻然然として國民教育を建てて天下に號せんとするも、國誰氏の國たるかを知らず、民何の一種族の民たるかを知らず。」單なる幅の廣い「國民」という概念の中では、自分がどこにいるのかわからない。そこで「國民教育」より貴いものは何かといえは、固有の國粹を保存し自古在昔の特殊の種性・風習・能力・道徳を維持し歴史の光榮を發揚して、其の獨立の位置を完全にすることである。それ故、種族を以て立國の根據となす民族建國の結果としての「國民教育」でなければ意味がないのである、と楊は主張する。

すると今度は、僅々國民教育を標擧するだけでは未だ足らず、救國の術は尙武の風習を倡起し、軍人の資格を養成するにあり、として「軍國民」三字を掲げて以て天下に號せねばならぬ、とする者が現われて、具體的には外國列強の侵略反對の口號を掲げるが、彼らが大聲疾呼して言うところの軍國民教育なる者は、支那民族の利ではあるけれども、未だ必ずしも遽かに非支那民族（＝滿洲族）の害ではないので、彼が能く之を利

用すれば、亦威力を境外に伸して、牆の患を紓肅し、私産（それは本來我々のものであった）を保することができるだけだ。もし支那民族軍國民と直掲するのを憚って名のみ單に軍國民と唱えたのだとしても、その實を行おうとするとそれは非支那民族の斥絶せざる能わざるところだから、どのみち彼をあざむくことはできず、かえって吾が民に又も奴隸の模型を示すというマイナス面しかない。従って支那民族軍國民教育を直掲して教育に従事するものの事業となすべきである、として彼は軍國民教育會内に中國革命黨會を密設して暗殺に従事するのである。

なお、ここで用いられている「教育」という用語は、「宣傳」或いは「鼓吹」という言葉を憚っての隱語ではないかと考えられる。少くともそうよみかえることは自然である。例えば「凡そ各國民族の革命の事業に鼓舞興起するのは、教育の影響に由らざる者なし」と言う如く。そして又楊は、革命事業に於ては、必ず下等社會を以て中堅、根據地となし、中等社會を以て前列、運動場とする、そして前者に對する教育（鼓吹）の事業は四あり、即ち特別の團體を結集し、秘密の書報を流通し、公共の機關を組織し、進取の風尙を鼓舞することであり、後者については、秘密社會・勞働社會・軍人社會、就中、後二者の大半がその間より出る秘密社會と伍をなすべきである、としている。そしてここでつけ加えておかなければならないのは、楊がこのように、下等社會ではなく、中等社會の革命事業に於る主體的役割を重視したのは、下等社會を革命の主要力量として認識できなかったからである（と）というよりも、自身中等社會の一員とし

て、暗殺等、身を捨てても個人の行動によって革命を行わんとする主體的意志の表白に急であつたからであらう、ということである。

(1) 『辛亥革命前十年間時論選集』第一巻上册(三聯書店、六二年出版)所收。これは無署名論文であるが譚彼岸は前掲書に於て之を楊の作としている。文章や語彙を見ても、又同誌が大半楊の手に出づといわれることから見ても、之を楊の著とみなすことは妥當である。又、副題に「此の篇は日本高村世雄の論ずる所によつて之を増益す」とあるが、編譯である形跡はなく、楊自身の考えによる立論であらう。このような副題をつけたのは、文中に滿洲の二字を使わず非支那民族と言っている所などをも考えあわせると、或は彈壓を憚つたからであらう。前節註(5)参照。

三

(2) 楊世驥前掲書九七頁参照。

こうして變法運動の失敗を経る中で、この運動のいわば象徴で「國民」という概念の中から、主體としての「民族」を析出・發見していった楊は、次にそれを更に詳しく小冊子「新湖南」に於て展開するのである。この小冊子は、楊と同じく變法論から排滿論に傾いていった歐榘甲が前年に出した、廣東が獨立して滿清の羈絆から脱離すべきことを説いた小冊子「新廣東」を受けてかかれたものであつたが、その第一篇「緒言」で楊はまず、變法失敗後、澎湃として起つてきた排滿論を抑える目的で

書かれた、嘗ての指導者、康有爲の「南海先生(與南北美洲諸華商)辯革命書」(『新民叢報』第一六號、一九〇二年八月出版)を批判しそれをのりこえようとする。即ち康の言によれば「凡そ物は合すれば則ち大、分れば則ち小である。合すれば則ち強く、分れば則ち弱いのは物の理である。……ロシアが大國である所以は諸種族を旁納せる故を以てではないか、滿洲は漢を合せると萬里の地を開き中國擴大の圖を行つた。教化はもとより益々廣く被び、種族は更に増々雄厚となつた。つまり中國に益があつたのである。……そもそも夷夏の別は『春秋』に出るが、そこではただ德のみが親しまれている。それだから孔子の所謂ゆる中國夷狄の別というのも、今の所謂ゆる文明野蠻のごときものにすぎないのである。だから中國夷狄といつても決つた言葉なのではなく變移するものであつて、德があれば夷狄も中國と謂い、道が無ければ中國も亦夷狄と謂うのである。將に進化の爲に考へるべきであり、人種の爲に考へるのではないのである。……そして滿州は明代に於ては、春秋時代の楚のようなものだつたが、今は漢の高祖の時の楚のようなもので、純ら中國である。だから君にして道無く民を保つことができず、命を革めようとするならば命を革めるだけだ。どうして必ず滿を攻めて自ら内亂を生もうか。……滿漢は不分である。」と。

たしかにこれは一見説得力がありそうに見える。中國文明の進化の爲にわざわざ滿を敵として定立する人種的觀點は必要であらうか。楊は何故滿を排する思想を導入しなければならな

ったのか。まことに康の言う如く「今、地を割き民を齧ぎ、款を賄ない民を剝るのは誠に痛恨すべきだが、此れは單に西太后・榮祿・剛毅ら數人の罪であつて滿洲全籍人の與り知らぬところであるのに、どうして盡く之を攻めようか。」ということになる。そこで楊が言うには、凡そ民族を吸い集める時は必ず力が働き、そしてその結合力には二種あり、一は「化合」に例えられる「親和力」で、自然に生れ同種に於て最も著しい。他の一は「混合」に例えられる「混合力」で、現在過去の事會に生れ、歴史に混成し、政治上の調和と宗教の融結力による。異種の結合は後者によるが、合せる方が強大で、合わせられる方の民族根性が如何に薄くとも、全く滅亡してしまわない限り、それは所詮混合にすぎず、必ず解散の形状を呈する。今滿族混合の實力既になく、この列強環視の危機的状況の中で、もし滿族と離絶しなければ、自らの吸集力 $\parallel$ 親和力を凝固することができず、彼と共に白種人の醜醜毒肺の下に斃れるだけだ、と。

ここで楊は「自ら相固著する」ことを危機に際しての第一の要請としなければならなくなっている。そこには既に進化とか文明とかいふ言葉の登場する餘裕はない。間に隙のある混合に依ることはできず、自然的生理的に一丸となりうる（と楊は考える）同種の親和力にしか依ることはできないような事態になっている、と捉えられている。こう見てくると、楊に於る排滿思想は第一義的には危機に際して自己に歸りそこに主體を創出しようとして提出されてきたのであつて、直接に滿を排する、復仇する、ということとは第二義であるということがわかる。夏夏

の別という傳統的な考え方は、康の如く文化的差別（段階）として捉えられるのではなく、危機に際しての自己の確認、自覺、つまり民族的區別として捉えられているのである。自他の區別のないところに自覺は生れない。排滿思想の中には已に滿 $\parallel$ 他、を排する $\parallel$ 區別する、ことによつて自己を確認しようとする主體の自覺めへの意志が含まれていたのであつた。

次の第二篇「湖南人の性質及び其の責任」に於ては「湖南人の腦脊に流傳すること最も醜にして深なる」明末清初の種界の悲劇が掘り起され、華生歸根立命の所とするべき種族の感しみ、漢人家國の痛を説いた王船山が思い起される。しかし又譚嗣同の説く如く、太平天國の際そうした種性を忘れ、同種を鏝滅して胡族に媚び、天下の大罪を負つた點が反省される。そして楊は主觀的判斷に於て天下に負つた罪を重しと規定し、そしてその湖南人の「原罪」を自ら荷おうとする姿勢でその重い責任に立ち向おうとする。新世界を開辟しようとするならば、先ず前耻を揃雪しなければならぬ。前耻を揃雪するには先ず自ら之を血を以て購え、と楊は湖南の中等社會が歴史に負つた（と楊が判斷する）責任を血で果すよう呼びかけるのである。

第三篇「現今大局の危迫」では、中國内部の中心點（勢力範圍）を足場とした諸列強の侵略は太平大同の壘を築こうと、兼愛平等の波に導かれようと、防ぐことはできない。何故なら現在の危機の本質が、列強が我が不肖の官吏・紳富を指揮して、我が不肖の儒民を屠割・鈴束し、更に下つて我が不肖の教民・窮民を驅策・愚誘して同類を殲滅し、異種を擁護させている點

に、つまり侵略が單に外側からのみ來ているのではなく、民族内部にまで浸透して同類相食む事態にまで進んでいる、ところに求められるからである。こうした内部分裂に際し、列強を虎或は羅に例えれば、滿族は俵、囀の役割を果して、民族的同一化のガンになっているのだが、しかし此れは怪しむに足りないものであって吾が湖南が自らその種性を忘れて、自ら此の壘果を造って追れることができないようにしてしまつたのである、列強が東亞を以て二〇世紀商工業競争の中心點とし、そこで客ではなく主たらんとすること久しいものがある現在、これに對するには自らが自らの主となれるようにせねばならない、と問題を自己の内側に引きつけて、現今大局の危迫を認識して、第四篇「湖南新舊黨の評判及び理論の必ず一途に出づること」に續け、ここで王先謙・葉德輝・孔憲教ら諸々の新舊黨が徒らに私利私權を争うのみであつたことを批判・反省しつつ、自らの理論「民族建國主義及び個人權利主義を展開するのである。曰く、近時歐美の民族主義の前には固より已に所謂帝國主義があつたが、思うに此の主義の原動力は或いは世主一人の野心に出、或いは武夫健將一二人の權略に出るに過ぎないものであつた。しかし、民族主義が變じた現時の民族帝國主義となつたとは異なる。則ち、此の主義の原動力となつてゐるのは、國民一人々々の生殖蕃盛の力の膨脹する所或いは又國民一人々々の工商業發達、資本充實の膨脹する所であつて、全國國民の思想を發生の基本とし、全國人の耳目を運動の機關としてゐるのである。このように今日地球諸國に於て所謂陵厲無前なる帝國主義

は實に民族主義を以てその根柢としてゐるのだから、この帝國主義の潮流を横遏せんと欲する者は、同じく民族主義を以て壘壘を築き以て之を捍るのでなければ如何ともしがたい、と。かくて民族建國主義は民族の一人々々が滿をしりぞけて、自己が自己である所以「種性」を自覺し、自己が自己の主人となることがその基礎である。すると、楊に於る民族建國主義或は排滿思想は自己認識或いは自己の發見という媒介を加えて考えてみると個人權利主義「個の自覺」につながるものを本來その中に持っていた、ということがわかる。民族建國主義は個人權利主義を得て之を輔翼しなければ、其の分子の親和猶お未だ密ならず、其の質點の結集猶お未だ堅ではない、と楊は言う。又、人が中國を視て公共の中國となすのみで、個人權利主義を基礎にしないならば、中國は質點排斥せるのみの混合物で、自覺をもとにした親和力構造の化合物ではない。混合物は積沙の如く風に遇つて揚り、流れに隨つて蕩き、外力を受けるのが鎔鉄に及ばないのに已に離絶播散の象がある。化合物はそうではない、其の本來の親和力の原則（それは種性或いは個の自覺に基づく）に依るのでなければ決して之を改變、滅亡させることができない程強い、と楊は言う。こうして、排滿と民主は接續されて理論の必ず一途に出ることが論證され、その行動として第五篇「破壞」が説かれる。一次抑壓すれば反對の風潮も亦一次高まる。重力を壓水櫃に加える如く、擠力愈々緊れば噴き出すこと愈々強い。皮球を地に擲ずる如く、用力愈々猛ければ躍

起すること愈々疾い。故に抑壓は反對の良友であり破壊の導師である、と破壊・暗殺・暴動が説かれる。しかし、破壊者を炸薬・強水（硫酸）に例えてみると、それは既に發した後には絶大の分解力を有し絶大の生産物を残すが、しかし已に變じて功用をなして後はそれ自身の能力は散じて飛煙の如く銷えて幻泡の如く、復たは其の原來の體質形状を存さず、と破壊主義の限界を見きわめつつ、暗殺者としての自己を捨石として位置づけている。

かくて最後に第六篇に於てこうした理論と行動との政治的表現として、湖南の自立が、中國の「獨立」の爲の不可欠の第一歩であることが説かれ、獨立の歌がよまれる。湖南自立の主張は、已に戊戌變法時に於る郷紳層による清朝體制内に於る地方の相對的獨立の主張とは質を異にしている。それは危機に當る主體を滿漢不分の枠の外に析出、創出しようとするものであった。そしてその方向は後の華興會の長沙起義をはじめとする革命運動の方向を指し示していたのであった。

(1) 一九〇三年日本で出版された。署名は湖南の湖南人。前掲『時論選集』第一巻下冊所收。

(2) 歐は廣東の人。署名太平洋客。康の弟子。梁の下に時務學堂分教習に任じていたが、その思想は急進的であったという。戊戌政變後、横濱に逃れ梁を佐けて「清議報」撰稿人の一であったが、滿清を排斥する論調あり、又一方孫文ら革命派とも近づき、爲に康の忌に觸れサンフランシスコに遣わされて『大同日報』等を主宰した。「新廣東」は、

はじめ同報に連載され、後、横濱新民叢報社から印行された。

(3) 武藤明子氏は「陳天華と楊毓麟」(『寧樂史苑』第一四號、六六年)に於て「楊……にはこの點(個)の自覺を指す——筆者)がま……たく缺如していた(傍點筆者)としているが、これは以上の點から見てもうなずけない。

#### 四

劉大年氏は「辛亥革命と反滿問題」に於て、反滿はこれまで一つの獨立した運動ではなかった、それは異なった時に、異なった階級の利益に従った、例えば清初入關時に於ては、大地主は反滿派であったが中小新興地主はこの新政權を迎えて反明擁護派であった、それ故この時點に於ける反滿は基本的には地主階級内部の權力闘争の範疇内にあるものであって、決して封建制を打破して歴史を前進させようとする進歩的の革命運動ではなかった。しかし二〇世紀初頭、單純な農民戦争がすでに過ぎ去り、労働者階級はまだ一つの獨立した力として政治の舞臺に登場しておらず、歴史を推し進める力がブルジョワ革命派の手中に集中していた時の、つまりブルジョワが民主革命を行わんとしつつあった時の、反滿闘争は全て民族的差別による損害をはねのけ、ブルジョワの敵、専制制度を打倒して、政權を手に入れ、資本主義を發展させる爲に道を開かんとするものであったから、この時點に於ける反滿闘争の内容はつまりブルジョワ民主革命の内容にイコールなのであって、前者は後

者の範疇内にあるものであった、という観点から、資産階級革命者のふりまいてい所謂辛亥革命國內民族革命説、つまり辛亥革命を漢族の滿族統治反對とだけ捉えて、それが基本的には歴史を一段階前進させたブルジョワ民主革命であったことを否定する説を批判している。

ここで劉氏はあくまで辛亥革命中の反滿問題をブルジョワ民主革命の一部として、その枠の中で理解しようとしているようにみえる。劉氏は辛亥革命を舊制度との鬭争という観点から見る時、英佛型革命よりは劣るが、プロシア型よりは進んでいると規定し、辛亥革命があくまでブルジョワ革命の中國的一變形であるという理解の仕方の中で反滿問題を位置づけようとしている如くである。つまり、比喩的に言うならば、辛亥革命中の思想家の中に「中國のロック」や「中國のルソー」を探すことが少くとも理論的には可能である、ということになる。しかし、このノートに於る我々の問題關心は、ブルジョワ民主革命的要素を、或いは「中國のルソー」を、辛亥革命中に探し出すことにはなかった。我々は、辛亥革命がブルジョワ民主革命であったか否か、と問う前に、辛亥革命をそれ自體に即して見てみたいと思つたのである。そして、その結果、そこにそうした要素が存在していたとしてもそれはそれでよいのである。つまり、我々の問題關心は辛亥革命中の排滿思想の中に、ブルジ

ョワ民主主義思想を見出そうとすることにあり、それはなく、「ロック」や「ルソー」を含んでしかもそれを超えるものとしての、その後の中國革命の展開を必然にするようなものの萌芽がその中に已にあったのではないか、というところにある。だから、私達は反滿がブルジョワ民主革命の内の一部である、とは言わず、反滿が何を内包していたのか、少くとも孫文の如きブルジョワ民主革命的要素はその一部ではないのか、という問い方を出発点としたのであった。そのように見てきた結果、我々はとりあえず、排滿思想が本質的には「自己に歸る」「自分をとりもどす」ものとしてあった、ということを確認することができた。しかし、これは楊篤生の場合についてだったのであって、我々は之を西歐民主主義思想と比較したりする前に、更にもっと深く、他の人々の場合について、その排滿思想の内容をさぐってみなければならぬ。

(1) 『中國近代史諸問題』(人民出版社、六五年)所收、原載『歷史研究』六一年第五期。

〔付記〕 本稿の作成にあたっては、大學院増淵ゼミナールに於る御指導と討論、及び西先生の御批評を頂いた。ここに記して厚く感謝の意を表します。

(一九六七・六・一五)(一橋大學大學院學生)